

たんの小史 ふるさとと端野

⑰

先達の方々

屯田地区以外の地区(その3)

豊実地区

豊実地区は、ニコロ川に沿ったニコロ原野とキトタウシナイ川に沿ったキトタウシナイ原野区域で、明治一六(一八八三)年、常呂外六ヶ村の一つ手師学村に属していました。ニコロはアイヌ語で「樹木がたくさんあるところ」、キトタウシナイは「いつもギョウジャニンニクを採取する沢(川)」という意味です。

明治三〇(一八九七)年六月、野付牛村外一ヶ村戸長役場が野付牛に設置され、この時には野付牛村の管轄になりました。大正四(一九一五)年、忠志地区と同じく常呂、野付牛境界変更の住民運動により、翌五(一九一六)年四月、手師学村のニコロ川流域(現在の仁頃、豊実、北登地区)は野付牛に編入されました。

大正十(一九二一)年四月、端野村が野付牛町から分村し、「端野村下仁頃第一部」となり、昭和十三(一九三八)年字名改正

により、「北実」となり、昭和二九(一九五四)七月、隣接の北見市の北見と北実とがまぎらわしいため、字名の改正をすることとなり、名称は地域の人たちの公募より行い「豊実」に改められました。

また、大正一三(一九二四)年十二月、この地に登位加(北登)尋常小学校所属貴登多牛教授場が開設されましたが、この校名は、この地のアイヌ語のキトタウシナイを漢字で表したものです。

この地区に開拓の鋤が入れられたのは、ニコロ原野一帯が明治三四(一九〇一)年植民地に編入され、同三八(一九〇五)年、この地の本願寺農場が開設され、この農場開拓のため石狩郡愛別から田中五十郎、五十嵐助市の両氏が入地、続いて和田君太郎、伊藤伊三郎氏が入地し、この地区の草分けとなりました。また、キトタウシナイ原野には、明治四三(一九一〇)年民有未墾地の払下げを受け佐藤太惣治、目黒文治、半沢勇之丞、長川六蔵、高橋守広、松崎重蔵等の各氏が入地、この地の草分けとなりました。その後も、この地をめざした多くの人たちが入地し、今日の豊実の礎を築かれました。

近年の人口の減少が続くなか、平成十六(二〇〇四)年一月、隣接の北登地区と連合自治区会を統合し「豊北自治連合会」に改組しました。なお、ニコロ原野に開拓の

鋤が入れられてから百年を迎えた、平成十九(二〇〇七)年十二月、「豊実ふるさと百年記念碑」豊かな大地に夢と実りの里「豊実小学校碑」強く、明るく、考える子ども」を建立しました。



(裏面へ続きます)



北登地区

北登地区は、トイカ原野とニコロ原野の一部を含む区域で、豊実地区と同じく、常呂村外六ヶ村時代は手師学村に属していました。

トイカ原野は、仁頃川支流トイカ川一帯の地名で、トイカとは、アイヌ語で「こんもりと土の盛り上がりがあるところ」という意味です。野付牛村時代は、豊実地区と共に「野付牛第二〇部」に属していました。

大正一〇（一九二一）年、端野村が野付牛町から分村し、行政区は「端野村下仁頃二区」となり昭和三（一九二八）に「下仁頃第二区」、同一三（一九三八）年字名改正により「北登」となりました。

なお、大正五（一九一六）年一〇月、下仁頃尋常小学校所属特別教授場がこの地に開校された時、校名をこの地区の地名のトイカを漢字に当て「登位加特別教授場」としました。

未開のこの地に開拓の鋤が入れたのは、分村時、当時の下仁頃第二部長から端野村長への報告によると、「明治三五（一九〇二）年に井坂文太郎、同三七（一九〇四）年に中村市太郎、同四〇（一九〇七）年に齊藤弥五郎の三氏が入植しており、これ等の人たちの入地状況や経緯は不詳・・」とありますが、この三人の方々が北登地区の草分けとした開拓の鋤を下した方々と言え

ます。

明治四三（一九一〇）年、ニコロ原野増反区に国有未開地の無償貸し付けを受け、未開の荒野に開拓の鋤を入れられたのは、松浦茂三郎、加藤善二郎、高橋美代吉、桐山喜一郎、太田久作、加藤清吉等の各氏で、これに続き、岡田弥吉、松浦勘三郎、丹治み弥の各氏で、これらの方々が北登地区の開拓の先駆者となりました。

なお、トイカ原野に開拓の鋤が入れた九十年を迎えた平成四（一九九二）年七月、旧北登小学校校庭に「北登開拓記念碑」を、また、百年を迎えた平成十四（二〇〇二）年七月、「記念碑く愛郷の里」を建立しました。また、豊実地区で記しましたが、平成一六（二〇〇四）年一月、豊実自治連合会と統合し「豊北自治連合会」に改組しました。



田中 誠

参考文献

端野町史（昭和四〇年発行） 端野の夜明け（第三集）（平成元年発行） 端野のアイヌ語名（平成元年発行） 端野の和地名（平成四年発行） 北登開拓記念誌（平成四年発行）